

# 現代日本の文芸関係者のもつ図書館観の一断面

——雑誌『図書館の学校』巻頭エッセイの分析 図書館はどうみられてきたか・5——

佐藤毅彦

## Images of the Library, 5

### How Have Japanese Writers Depicted Libraries?

——Analysis of Essays Carried by the Magazine *Library School*——

SATO Takehiko

**Abstract :** This paper examines how libraries are seen by writers at this time when the relation between writers and libraries has been called in question by such events as the introduction of public lending rights. There are some who ask for the revival of a dignified concept of the library. However, some of those who express this view do not in fact use libraries, or on the contrary they make too great demands on libraries. Such people cannot be satisfied with the reality of libraries. The view of those who understand the actual library situation is also examined, and an appropriate response from literary persons concerned is called for so that this understanding may spread to all in the literary world.

**要約 :** 現在、公貸権の導入など、作家と図書館との関係が話題となっている。こうした時期に、雑誌『図書館の学校』に、集中的に掲載されたエッセイを分析することで、図書館が現代の文芸関係者に「どうみられて」いるのか明らかにしようと試みた。彼らの中にはかつての「威厳」のある図書館に復することを求めている人たちも存在する。しかし、そうした見解を表明しているのは、現在、図書館をほとんど利用していないか、あるいは自らの要求水準が高すぎるために、公共図書館サービスに満足できない人たちであった。現実の図書館状況をある程度理解している人たちの見解も掲載されており、それが文芸関係者全体に広がっていくように、図書館界全体の適切な対応が求められている。

#### 1. はじめに

昨年放送された「ベストセラーをめぐる攻防 作家 vs 図書館」(NHK『クローズアップ現代』2002年11月7日放送)は、作家と図書館との関係について、さまざまな議論が展開される中で話題を集めた。番組の中で『ハリー・ポッター』シリーズの最新刊など、ベストセラーの複本を大量に提供している例として町田市立図書館が紹介され、その取材方法や、報道内容について、図書館がわからの反論も発表されている<sup>1)</sup>。

作家がわの主張としては、最近の図書館は「無料貸

本屋」になっているのではないかと、作家の利益を侵害しており公貸権を導入すべきだ、それぞれの図書館がある特定分野に特化した分担収集を行ないネットワークによって資料提供を考える必要がある、などがあり、それぞれの点についてさまざまな論者が自説を主張している<sup>2)</sup>。しかし、その中には、現実の公共図書館の実態を反映していないものもあり、すでに以前から多くの図書館で実施されてきているサービスの必要性を主張したり、設置主体や規模の違いによってすべての図書館では提供するのが困難なサービスを求めているケースが含まれている。これに対して、図書館関係者からは、現実の状況に立脚した具体的な反論がな

されてきている<sup>1</sup>。

これまで「図書館はどうみられてきたか」というテーマでは、テレビドラマやミステリ作家の図書館観について、個々の作品内容や、作家の見解を取り上げて分析してきた。今回は、図書館との関係が話題となっているこの時期に、現代日本の文芸関係者に「図書館はどうみられてきたか」を示す見解が、同一のメディアに、連続的に、一定期間にわたって掲載されたものとして、雑誌『図書館の学校』の巻頭エッセイをとりあげ、分析の対象とした。

## 2. 雑誌『図書館の学校』

2000年1月に創刊された、雑誌『図書館の学校』(月刊)は、「NPO 図書館の学校」と「TRC (図書館流通センター)」が、「編集・発行」としてクレジットされていた。その巻頭には、図書館に関連したエッセイが一篇から二篇(ときには三篇)、毎号掲載されてきた。たとえば、小田光雄の『図書館逍遥』は、さまざまな作家や小説作品と図書館との関係について記述しているが、これは、雑誌『図書館の学校』に「図書館のある風景」(2000年5月~10月)として連載されたものがもとになっている<sup>1</sup>。2003年4月には、誌面が大幅にリニューアルされ、継続して掲載されている連載記事もあるが、文芸関係者による巻頭エッセイは2003年3月までで、それ以降は掲載されていない<sup>2</sup>。

図書館に対する作家の見解が話題となっているこの時期に、図書館関係の同一雑誌に、集中的に掲載されたエッセイを分析することで、現代の文芸関係者に図書館がどう「みられて」いるのかについて、その一断面を明らかにしようと試みた<sup>3</sup>。なお、この雑誌は、今回(2003年4月)のリニューアル以前にも、何回かのマイナーチェンジを行なってきており、この論文では、創刊時点の題字(タテに色文字で「図書館の学校」)が使われていた2000年1月から2001年4月まで(2001年5月からの題字はタテ黒字「図書館の学校」、2003年4月からはヨコ黒字「図書館の学校」)に掲載された30点あまりを分析対象とした。

## 3. 雑誌『図書館の学校』巻頭エッセイの分析

### 3-1 分析対象

今回とりあげたものは、次の通り。なお、全体の文字数は、(一行の文字数)×(行数)の概算による。

左から、整理番号、掲載年月、作家名、生年、タイ

トル、全体の文字数(百の位以下は切り捨て)、の順。

01. 2000. 1 林望 1949「図書館へ行こう」(講演) 約 29,000 字<sup>1</sup>
02. 2000. 2 出久根達郎 1944「図書館が学校」 約 12,100 字<sup>2</sup>
03. 2000. 3 阿刀田高 1935「図書館アト・ランダム」 約 11,100 字<sup>3</sup>
04. 2000. 4 吉村昭 1927「図書館がなければ、小説は書けません」(インタビュー) 約 2,700 字<sup>4</sup>
05. 2000. 4 申間努 1963「個人メディアに活用! 極私的図書館利用法」 約 9,700 字<sup>5</sup>
06. 2000. 5 目黒考二 1946「図書館員をめざした若き日のこと」 約 9,600 字<sup>6</sup>
07. 2000. 6 鶴見俊輔 1922「図書館から図書館へ」 約 6,800 字<sup>7</sup>
08. 2000. 6 柏木博 1948「情報の宇宙(図書館)の楽しみ」 約 3,300 字<sup>8</sup>
09. 2000. 7 荒俣宏 1947「図書館はおもしろくない」 約 5,400 字<sup>9</sup>
10. 2000. 7 荒川洋治 1949「図書館には行かない」 約 3,400 字<sup>10</sup>
11. 2000. 8 山口昌男 1931「図書館との出会い」 約 6,100 字<sup>11</sup>
12. 2000. 8 石川准 1956「視覚障害者の読書スタイル 電子テキストの時代」 約 2,500 字<sup>12</sup>
13. 2000. 8 あんばいこう 1949「酒場と図書館」 約 700 字<sup>13</sup>
14. 2000. 9 種村季弘 1933「明るい図書館・暗い図書館」 約 3,400 字<sup>14</sup>
15. 2000. 9 長山靖生 1962「図書館が生活のリズムをつくる」 約 6,300 字<sup>15</sup>
16. 2000. 10 阿部謹也 1935「図書館で過ごした日々」 約 4,800 字<sup>16</sup>
17. 2000. 10 中西秀彦 1956「電子時代の図書館の役割を考える」 約 3,200 字<sup>17</sup>
18. 2000. 11 小川洋子 1962「図書館とアンネ・フランク」 約 3,200 字<sup>18</sup>
19. 2000. 11 石川九楊 1945「図書館とコンサートホール」 約 5,200 字<sup>19</sup>
20. 2000. 12 山之口洋 1960「仇敵にして戦友」 約 3,300 字<sup>20</sup>
21. 2000. 12 山本昌代 1960「ふりむけば図書館」 約 3,200 字<sup>21</sup>
22. 2000. 12 小池昌代 1959「図書館のことを何も知

- らない」約 2,600 字<sup>22)</sup>
23. 2001. 1 星野智幸 1965 「魅惑的な異界」約 3,300 字<sup>23)</sup>
24. 2001. 1 東秀紀 1951 「大英図書館のイラン人」約 5,200 字<sup>24)</sup>
25. 2001. 2 長田弘 1939 「問われなければならないのは」約 3,100 字<sup>25)</sup>
26. 2001. 2 きたやまようこ 1949 「著作権について 絵本作家の立場から」約 2,300 字<sup>26)</sup>
27. 2001. 3 別役実 1937 「近所の図書館」約 3,300 字<sup>27)</sup>
28. 2001. 3 夏目房之介 1950 「マンガにおける図書館」約 4,200 字<sup>28)</sup>
29. 2001. 4 中村稔 1927 「図書館・文学館あれこれ」約 3,100 字<sup>29)</sup>
30. 2001. 4 内堀弘 1953 「棚作り」約 1,500 字<sup>30)</sup>
31. 2001. 4 松本圭二 1965 「ビネガー博士のラクラク健康法 フィルム・アーカイブの仕事」約 3,900 字<sup>31)</sup>

(この後、本論文中でそれぞれのエッセイを取り上げる際には、整理番号、作家名、生年、を示す)

### 3-2 林望の見解

これらの中で、01. 林 1949 のものは、例外的に、講演をそのまま記録したものであり、長さも飛び抜けて長い。林は、作家・書誌学者であり、「図書館は無料貸本屋か」というタイトルの文章を雑誌『文藝春秋』2000 年 12 月号に発表することで、この種の議論が展開されるきっかけをつくった一人でもある<sup>32)</sup>。

冒頭から林は、活字離れ、現代国語の教科書、などについて持論を述べた後、「図書館には図書館の別の使命が」として、具体的に自説を展開していく。「公共図書館」の役割は、大学図書館などの「研究図書館」とは、異なるとしながらも、ベストセラーは「せいぜい三冊買えば」よく、「図書館の使命は」「どれほど質の高い本をそろえて持っているか」にあるとし、「本当に心ある運営をするのであれば」「選書委員会なり、運営委員会というものを」「市内の識者に」依頼し、推薦してもらい取り組みがあつていい」とする。「図書館予算の使い方というものについて、公共の図書館であろうとも、やはり一定の誇りというものがないといけない」というのが彼の主張の基本である。また、図書館は「あんまり意味のない人がたくさん寄って何冊利用したなんていうことを誇っても仕方がない」「数量で考えるということはまった

く見当はずれ」と現在の図書館評価のあり方に疑問を呈している。開館時間や閲覧サービスなどについても、海外の図書館の事例を引きながら、日本の図書館の現状を批判している<sup>33)</sup>。

3-3 創刊直後、数ヶ月間に掲載された長文エッセイ  
創刊直後に掲載された、02. 出久根 1944, 03. 阿刀田 1935, 05. 申間 1963, 06. 目黒 1946, のエッセイは、その後の時期に載ったものよりも長く、分量的に 10,000 字前後で、図書館に関連のある内容もかなり多く含まれている。

02. 出久根 1944 は、冒頭に、司馬遼太郎の「古本屋と図書館が自分の学校だった」との言葉をひき「私は古本屋は、有料の図書館だ、と思っている。書物の保存を、客にゆだねる。この一点だけが、図書館と異なる」と述べる。周知のように、この著者は長期にわたって古本屋を経営した経験があり、そのこともこうした文章に表われていると思われる。著者と図書館の関係については、小学校三年生のころに移動図書館を利用したこと、中学校卒業後上京し、古本屋の店員になった後に利用した日比谷図書館のこと、などが述べられている。また「ベストセラーの面倒までみる必要が図書館にあるかどうか」とし、古本屋での経験から利用の少なさだけで廃棄にまわすことに疑問を呈し「名著は、保存すべきだろう」と述べる。「現在の私は図書館に出かけることは、めったにない。しかし、私にもまた、図書館と古本屋が、自分の学校だったな、としみじみ思うのである」と結ばれる。

03. 阿刀田 1935 は、国立国会図書館に勤務した経験をもっている。自宅の近くに開館した、杉並区立図書館の分館が「著述業者である私」にとって「職業的な文献利用にもちゃんと役立っている事実」を紹介し、図書館のネットワークについて「このあたりに、普遍的な図書館利用法のヒントが潜んでいるように思える」と述べる。また、資料の整理・活用法について、自身の体験をまじえて紹介し、「図書館とのタイアップを考えること」をポイントとしている。ただし「リファレンス・ブック」については「よいものを身近にそろえておくほうがよしい」「もちろん図書館にも」あるが「この手のものは、そば近くにあるほうがありがたい」としている。『無料貸本屋』という言葉については、「図書館員とはなんなんだろうか？」と問いを設定し、『貸し本屋と変わりありませんね』と、ちょっぴり嘆いていた図書館員がいた。娯楽のために図書館に足を運ぶ人が増えてくれば（もちろんよ

いことだ) そんな感じを抱くケースも多いだろう。図書館の仕事は根源的に町の貸し本屋と変わらない部分を相当にたくさん持っているし、あえて私見を言えば、『それがどうした? いいじゃない』なのだ。公立図書館は規模の大きい、上等な貸し本屋である。「だが、そこで働く図書館員をして、町の貸し本屋と異ならせるものは」「文献に対する知識、教養、ゆとりのようなもの」だとしている。

05. 串間 1963 は、「小学校三年生(昭和四十七年)のとき、自宅の近所に新しい市立図書館ができ」「一回の貸し出し冊数は一人あたり二冊まで」だったが、家族の名前を使って借りたことなど、具体的に利用経験についてくわしく紹介している。「一週間に一回は必ず通い、リクエストカードもバンバン出して、読みたい本を湯水のように買ってもらっていた」ことをあげ、当時、専門的な本をリクエストしたことについて「いまだったら、その手の本は国会図書館で読むか、県立図書館にリクエストするかアタマを働かせるだろう。しかし子どもには、地域図書館が持っている役割分担などわかりはしない。読みたい本であれば向こう見ずに注文するだけだ。図書館側とて、まさか小学生が専門書のようなものをリクエストするとは予想もしていなかっただろう」と述べている<sup>4)</sup>。また、現在の、文献調査と図書館利用についても、実例をあげてくわしく述べている。その中では、国会図書館で時間を有効に活用する方法を紹介したり、「図書館の役割分担を考えることが大事」であると述べている部分もある。

06. 目黒 1946 は、大学卒業後「図書館員になろう」と考えたころのことをはじめとして、過去の体験を語る。現在は、編集者として『図書館読本』を刊行した際、「全国二四六二館の公共図書館にアンケートを依頼」し「設問数四四項目。回収数は五一七館」であった体験から、図書館の実情についてはじめて知ったことを紹介している。利用する立場としては「資料類はそのとき役立てばいいので、永遠に持っている必要はなく、そういうときは図書館がいちばんいい」とし、さらに都立中央図書館が、調査の質問に電話で回答してくれること、を知っておどろいたことも述べられている。

### 3-4 2000年1月から2001年4月までに掲載されたエッセイの概要

他の著者のエッセイについて、図書館と関連のある部分を中心に要約すると、以下のようになる。

#### 04. 吉村 1927 「図書館がなければ、小説は書けません」

小説の題材について調べるため地方を旅行し、図書館に立ち寄ることが多い。「図書館にはとても優秀な人が多い」「ある都市の文化度は、そこにある図書館でできる」「知識の豊かな人をきちんと置いてほしい」と述べている。

#### 07. 鶴見 1922 「図書館から図書館へ」

留学した1930年代のアメリカで、ハーヴァード大学図書館を利用した。また、戦時下の海外での体験や、戦後京大の人文科学研究所に勤め、京大の図書館を使えるようになったことなどを紹介している。現在は「大学をやめると大学図書館には入りにくくなる」とし「歩いて十分ほどの岩倉図書館(京都)をたずねることがあり、そこで、知人の著書に遭遇したことを述べる。

#### 08. 柏木 1948 「情報の宇宙(図書館)の楽しみ」

「一九九七年に、パリに新しい国立図書館(BN)が完成」し、この施設によって、現在、あらゆる情報が電子的な信号に、書物とは異なった形式で、保存・検索・閲覧が可能となったことを紹介する。それでも、図書館の楽しみとは、その情報(書物)の棚の前で、物質としての情報を手にとり、あれこれとブラウジング(拾い読み)ができることである、と述べる。

#### 09. 荒俣 1947 「図書館はおもしろくない」

地元にある小図書館には発見がないのでおもしろくない、東京都立中央図書館や国会図書館にでかけるときは、いつも胸がワクワクする楽しみがある、とする。最近、日本の大学図書館で貴重な発見に遭遇した例を紹介し、最後には、地域の図書館にも新たな発見の可能性がひそんでいることを述べている。

#### 10. 荒川 1949 「図書館には行かない」

「借りたものを読むと落ち着かない。本は借りるものではなく買うものだと思っている」ことから、図書館で借りて読むばかりだと「本に対する判断力が育たなくなる」と主張する。ただし、いい図書館の実例として、「現代詩資料館・まほろば」を紹介している。

#### 11. 山口 1931 「図書館との出会い」

AとBの対話形式で、Aが質問者、Bが山口、という設定になっている。自身と図書館との関わりについて、小学校の図書室は、鍵がかかっている入ったことはなく、中学三年のときに、貸本屋で本を借りるようになったことを述べる。知人との出会いの話、『薔薇の名前』にまつわる話、などを紹介した後、現在は学長をしている大学で「山口文庫」という名称で、個

人の所蔵資料を学生に開放していることを紹介している。

#### 12. 石川准 1956「視覚障害者の読書スタイル 電子テキストの時代」

「視覚障害者の読書スタイルがこの二〇年間に大きく変化した」ことの実例を紹介する。以前は、読みたい本があると点字図書館に電話して、録音図書・点字図書を確認し、それらのものがないと、ボランティアか図書館に、録音・点訳を依頼していた。いまは、「コンピュータを使って読書」するようになり、「文字情報を音声化したり点字に変えたりする種々のソフトウェアが搭載」されたコンピュータを使って情報にアクセスするようになったことが紹介される。

#### 13. あんばい 1949「酒場と図書館」

「過疎の村に図書館を」と不要になった本を募った、秋田の青年たちの運動についてふれ、マスコミで大きな話題になって、三〇万冊を超える本があつまったことを紹介する。結局は「善意のゴミ」を送られることになってしまった事例を、超美談に仕立てて垂れ流したマスコミの、活字や図書館に対する盲目的な信仰こそが問題だとしている。

#### 14. 種村 1933「明るい図書館・暗い図書館」

「生まれてはじめて入館した図書館」は「荒れ果てた、しかし小体な学校図書館」であったとする。やがて「闇市の古本店が『私の図書館』」になり、「神田の大橋図書館に出入り」した。「その後もさほどまともに図書館の利用をした記憶はない」「東大教養学部の旧一高図書館」の「ガラスは大方が割れたままだった」という。理想は「人口三十万人くらいの中都市。自分の関心分野の文献の完備した図書館があり、快適な閲覧室と礼儀をわきまえた同好の閲覧者たちに恵まれて一日の大半をそこで過ごし」「とびきり優秀な司書が」いるところだとする。

#### 15. 長山 1962「図書館が生活のリズムをつくる」

著者は、大学時代に、紹介状を発行してもらって、他校の図書館でも明治・大正期の雑誌のバックナンバーを閲覧した経験がある。現在はプロの物書きではなく、歯科医として、地方都市（北関東の小都市）に在住している。古書は目録、ホームページで入手できるが、問題は新刊書で、田舎の本屋には文庫、雑誌など以外はならない、とする。「私はなるべく新刊は図書館で借りて読み、そのうえで手元に置かねばならない本を限定して注文するようにしている」という方法をとっていることを紹介している。

#### 16. 阿部 1935「図書館で過ごした日々」

「図書館といえる部屋を初めてみたのは中学一年生のとき」「中学校でも高等学校でも図書委員となり、図書館の世話をする役目」をした。大学に入ると、「一橋大学の図書館だけでなく、慶應や東大の図書館も利用していた」ことや、留学したボン大学の図書館、就職した小樽商科大学の図書館を紹介し、「歩きまわっているといろいろな発見がある」とする。「私が図書館を最も利用したのは」若い頃、ビール会社で、売り上げを調べるアルバイトをしながら、早めに終えて「千代田区の図書館へ行ったり」し、「各区の図書館をかなり渡り歩いた」ことを述べる。現在は「図書の発注によって多くの図書を借出すことができるようになったことは結構なことである」としている。

#### 17. 中西 1956「電子時代の図書館の役割を考える」

「今後の図書館の役割を考えるときブリタニカオンラインが示唆的」であるとし、「おそらく地域図書館での、小説本の貸し出しといった役割はしばらく残るだろう」が「現行の本のまわりにある産業や仕組みは印刷屋も含めて大きくかわらざるをえない」とする。「『本』という物理媒体」は、それだけで、読むことができることが特徴のひとつであり、「電子時代にあつて」「新たな図書館の役割は」「電子媒体の実体化」「電子データを電子データのままで保存していく」こと、「子供達と『本』の仲介をする場所であること」などにあると述べる。

#### 18. 小川 1962「図書館とアンネ・フランク」

「私が住んでいる倉敷」の近隣、真備町（まびちょう）の「町立図書館がオープンしたのを記念しての、講演依頼」を引きうける。「講演会」の会場へ出向くと「小川洋子フェアとして私の本が並べられていた」「自分の本が図書館に並んでいるのを見るのは、作家として一番の喜びだ」とする。

#### 19. 石川九楊 1945「図書館とコンサートホール」

「図書館は言うまでもなく、『モノの館』なのであることが近年忘れられている」と述べる。予算が少ない、というのは事実だが予算全体のうち「図書購入費が十五%に対し、人件費は六〇%前後」であることの問題を指摘する。「実際に利用する経験上言えば、極端に高価な書物、稀覯書、大型の全集や叢書、あるいはそれぞれの分野で古典的な価値ある底本等、手元に置くことのできない書物が確実に、できれば身近にあることが図書館への期待」であるとし、さらに、図書館と東アジアの文明・文化との関係を論じている。

#### 20. 山之口 1960「仇敵にして戦友」

「作家にとって図書館は、仇敵であり、戦友でもある」とし、「駆け出し作家の場合、そもそも図書館にしか作品がない」という。小説の取材には「ずいぶんな時間と労力と費用を調べものに費やした」「資料本は、できる限り買い集めて手元に置くことにしている」が、「月に二、三度は図書館に足を運ぶ。家からくるまで十五分ほどのところに、市川市中央図書館があって、ここは市の図書館としては充実した四十五万冊の蔵書を備え、レファレンス・サービスの質も比較的高いから、普段の調べものに重宝している」とする。また「パリの新国立図書館」について紹介している。

#### 21. 山本 1960「ふりむけば図書館」

高校の図書室や大学の図書館について紹介し、卒業した後は、「紅葉坂の県立図書館に通ってよく本を借りた」こと、国立市の「アパートから徒歩数分の距離にある市立図書館へ出かけるようになった」ことを紹介している。理想の図書館は「カウンターが無人かロボットがいて対応し、児童書コーナーは本館と別にすることだとしている。

#### 22. 小池 1959「図書館のことを何も知らない」

「地域の図書館にもっともよく通ったのは、中学生のころで、「大人になってからは引越しも多く、そのたびに様々な町の図書館に足を運んだ」ことを述べる。「ミステリー作家や出版社にとって、図書館は敵であると聞いたことがある」「ある図書館では、人気作家の話題作などは、同じものを一度に五冊くらいそろえていた」ことから「勝手独自の物差しで測った本の選定があってもいいと思う。万人に開かれた図書館、そのこと故に、逆にひずみが生まれてしまうのだろうか」と述べる。

#### 23. 星野 1965「魅惑的な異界」

子どもの時「本の家、すなわち図書館に住みたいと思った」ことがあるという。現在、切望していることは、「ネット上で各図書館の蔵書を検索できる」「取り寄せの注文をオンラインで可能」になることである。東京の世田谷区に住んでいるが「探している本を発見できないことが増え、心ときめく本との偶然の出会いもめっきり減った」「いまや私の図書館不信は大きすぎて、自分でも処理できないほどだ」と述べる。

#### 24. 東 1951「大英図書館のイラン人」

「二十年前ロンドン大学に留学」していたが、ある「イラン人のクラスメートのことは忘れられない」とする。彼に誘われて、ブリティッシュ・ライブラリーに出かける。後に、一度だけその図書館で偶然会った

が、以後の消息はわからない、という。

#### 25. 長田 1939「問われなければならないのは」

情報の時代というイメージの社会では、中心は「分ける」文化であり、教育社会としての「育てる」力をなくしてきたとする。それらの真中に「繋ぐ」文化があり、それが「蓄える」文化につながる。「蓄える」文化をになってきたのは「図書館の思想」である、とする。

#### 26. きたやま 1949「著作権について 絵本作家の立場から」

「最初のオリジナル絵本を出版してから二十五年以上になる」が、「公共図書館から著作権使用許諾の依頼書」がくると、依頼書に「『誠に勝手ながら著作権使用料につきましては、ご免除くださいますよう併せてお願い申し上げます』」と記されていることを紹介している。「著作権使用料として最初から予算の枠の中に入れることはできないのだろうか」と述べる。

#### 27. 別役 1937「近所の図書館」

「近所に図書館が」あり、そこから著作についての講演を依頼される。たいていは断っているが、「その図書館だとわかったとたん、何か断ってはいけないような気がして、引き受けてしま」う。その後「図書館として利用すべく訪ねるようになった、というわけはない」「しかし、それはそれでいいのだろう。それらがそこに在ると考えるだけで、何とはなしに私は安心するのである」という。

#### 28. 夏目 1950「マンガにおける図書館」

海外での日本マンガについて「経済的にも情報としても日本にあまり還元されていない」現状を紹介している。マンガは「雑誌で読み捨てられ、単行本は読んだら売り飛ばすものでしかなく、だから図書館の対象であるより」新古書店、喫茶店で扱われてきたとする。「出版全体へのシェアの大きさを考えれば、図書館がマンガを収容する度合いは相当低いのだと思う」が、「市場競争の中で消えていき、読めなくなってしまう名作マンガを読めるようにすることは、図書館の文化的機能の一つではないか」と述べる。

#### 29. 中村 1927「図書館・文学館あれこれ」

「懐かしい図書館」として「旧制中学の図書館」と「旧制一高の図書館」をあげている。「いまでは図書館を利用することは一年に一度あるかどうか過ぎない」が「高価すぎたり、冊数が膨大にすぎような辞書、事典の類」を図書館で利用している。「私の住居に近い大宮市立図書館は私の生活に不可欠の施設である」と述べる。「公共図書館では誰がどのように購入

すべき本を選んでも、たぶん一部からは非難を免れないだろう」「私は普通の市民には入手できないような、高価な事典、辞書類、学術書や少数のすぐれた出版物などを備えてほしい」とする。

#### 30. 内堀 1953「棚作り」

「本屋は棚作りと言うけれど、それは古本屋も同じだ」とする。ある老人との出会いを紹介し、この老人は「図書館のカード箱のようだった。記憶はいつも魅力的な無駄にあふれていて、気がつくとは私そこから思いもよらない本や雑誌を探し」たという。

#### 31. 松本 1965「ビネガー博士のラクラク健康法 フィルム・アーカイブの仕事」

勤務先の「福岡市総合図書館フィルムアーカイブ」での様子を、風刺的な筆致で紹介している。

### 4. 図書館についてのコメントの諸相

これらのエッセイで、ベストセラーの複本購入と、図書館での資料選択に関する点を中心に、現代の図書館について話題になっているトピックについてどのような記述をしているかを分析し、それぞれの筆者と図書館との関わりについて考察した。

#### 4-1 図書館でのベストセラーの扱いと複本購入について

01. 林 1949 は、公共図書館について「住民サービスがということが第一義」であり、「ある程度ベストセラー」「を揃えて、一般市民の利用に供するというのは、納税者サービスという意味から見ても正しい」と述べている。しかし、「『五体不満足』」「を五〇冊も六〇冊も」買い、それでも市民は「なかなか借りられない」し、「流行が去った時には、一冊だけしか残さない」で「四九冊は」「廃棄する」のなら、その予算で「日の当たらない本」「地道な学術書」「まじめに書かれたけれどもたくさんは売れなかった本」「を買えたかもしれない」とする。ベストセラーは「せいぜい三冊買えばよろしい」「いつでも貸出中で借りられないと思ったら、他の本を読むかもしれない」し「あきらめて買うかもしれない」「ベストセラーをたくさん買えば、それだけ本が貧弱になる」と主張している。また「単にベストセラーを読みたいなんて人は、もう相手にしないでいい」「『五体不満足』なんてものを、喜んで五〇冊も買って閲覧者に見せているのは、これはまったく図書館の使命の怠慢と言うべきものです。私はそれはもう自殺行為だと思います」と述べている

部分もある。

02. 出久根 1944 は、本の選別について「読者にゆだねるのも一方法で、要望の多い書物を購入する。ベストセラーに希望が集中するのは当然だが、ベストセラーの面倒までみる必要が図書館にあるかどうか」と述べ、一定の時期をすぎれば、『ブックオフ』などの新古書店で百円で買えるベストセラーより、「むしろ高価な本を購入すべきだろう」とする。

19. 石川九楊 1945 は「大衆に人気があるからと言って、ベストセラー本やマンガ本やビデオやCDを所蔵して貸出せばいいと言うわけではあるまい。大衆の娯楽については民間の書店や貸本屋に委ね、図書館は大衆の日常的思考のために価値ある本を備えるべきだろう」と述べている。

21. 山本 1960 は「ベストセラー本を開架式書庫に五冊も十冊も並べておくことが豊かさか」と疑問を呈し、「そんな文句をいう者は来なくていいと図書館の方がいかにも知れない」と述べている。

22. 小池 1959 は「ある図書館では、人気作家の話題作などは、同じものを一度に五冊くらいそろえていた。こういうことは、貸しビデオ店では、当たり前やることだが、公共施設で行なわれているとは意外だった。読みたい人が殺到する時期を過ぎたら、五冊の揃えは無駄にもなるはずだ」と述べている。

23. 星野 1965 は「いまや私の図書館不信は大きすぎて、自分でも処理できないほどだ。館内の壁に貼ってある予約本ベストテンを見るたびに、百貨店バーゲン会場を連想する。棚を見ても、これなら本屋へ行けばよかったと後悔する。図書館である理由がないのだ」と述べる。ただ「無料貸本屋化の責任の一端はベストセラーばかりを要求する側にもある」との指摘もなされている。

29. 中村 1927 は「過日、ハリー・ポッターの読者が何か月か待たなければ図書館から借りられないと報道されていた」「発行部数が百万部をはるかに越えるような、ハリー・ポッター・シリーズの如きを公共図書館は利用者に提供すべきだろうか」と述べている。

こうした主張を並べると、この雑誌に掲載されたエッセイの筆者のすべてが、ベストセラーの複本購入に批判的であるかのような印象を受けるが、必ずしもそうではない。やや異った視点からの見解を次にあげる。

20. 山之口 1960 は「新刊のベストセラーを大量に複本購入したりすれば、そういった作者はたしかに甚大な金銭的被害を受けるだろう。でも、ほくのよう

に、売り上げ冊数が全国の書店数にも満たない駆け出し作家の場合、そもそも図書館にしか作品がない地域があったりするわけで、図書館に置かれて多くの読者に作品と名前を知ってもらえることのほうが大切だと述べている。

09. 荒俣 1947 は「一回読んだら捨ててしまうようなベストセラーやノヴェルズ類は、地元の図書館から借りて読むほうがはるかに経済的だろう」「そういう意味からすると、多様な図書館が林立している現状は、当然といえば当然の結果である」としている。ただし、そうした図書館は「どうもおもしろくない。限りなく、おもしろくないのである」「地域の図書館」には、ふしぎと、発見がない」と述べている。

03. 阿刀田 1935 は「娯楽のために図書館に足を運ぶ人が増えてくれば(もちろんよいことだ)」としている。

#### 4-2 図書館の資料選択について

ベストセラーの複本購入に反対する作家の見解を先に紹介したが、そうした観点に立つと、資料選択に対しても、独自の主張が提示されることになる。

01. 林 1949 は「図書館の使命は」「どれほど質の高い本をそろえて持っているか」にあり、「本当に読みたいくても買えないような本をそろえるべき」とする。「どんな地味な本であれ、売れないような本であれ、図書館に行けば見られると、こういうことが図書館の存在理由でなくてどうしますか」「図書館予算の使い方というものについて、公共の図書館であろうとも、やはり一定の誇りというものがないといけない」というのが林の主張である。まず、第一に優先して購入すべきものとして、「基礎的な工具書」「ツールボックス」をあげ、それは「辞書とか事典、索引」「類書」「図鑑、図録」「古典体系のような全集叢書類」「どんな研究をするにも必ず必要なもの」であるとする。また「ちょっと古くなった逐次刊行物」も手に入りにくいので図書館での提供を望んでいる。つぎに優先すべきものとしては「研究図書館は、学術書とか学術論文の類、研究書」などを、「公共図書館はそういうものを買う理由はない」が、「あいまいな言い方ですけれど」「まじめな本を」購入すべきであり、「教養的な本、あるいは昔の本の復刻本」「その時期をはずすともう手に入らなくなるというような少数数刊行物」「内容が非常にすぐれているので永久的に持っていて保存されてしかるべきだろう」というような内容のものが事例としてあげられている。資料の取捨選択

が図書館のステータスを決めるとして、「本当に心ある運営をするのであれば」「選書委員会なり、運営委員会というものを」「市内の識者に」依頼し、推薦してもらい取り組みがあつていい、「図書館の司書の方々といっても、すべてに目配りできかねますので、本屋の見計らいで持ってきた」本ばかりが入ってしまうから「こぼれたものを積極的に拾い集める」必要があると述べている。

02. 出久根 1944 は「図書館は、本なら何でも置けばよいものではない。書物置き場ではないのだ。そんなことをすれば、破裂する。選別しなければ、ならぬ」とする。一定の時期がくればベストセラーなどは新古書店で格安で売っているから「この値で求められる本を、図書館が備えなければならないものかどうか、だ。むしろ高価な本を購入すべきだろう」と述べる。また「名著の評判が高い」森銑三著『明治東京逸聞史』のような図書を、「十年に二人の貸出」という利用の少なさで廃棄にまわすことに疑問を呈し、「名著は、保存すべきだろう」と述べる。

19. 石川九楊 1945 は、「いつごろからか知らないが、入館者数や本の貸出回転数が図書館活動の評価基準となってきた」「利用度が高まることは図書館にとって望ましいには違いない」としながら「それらを基準に置けば図書館の蔵書が貸出回転率の高い、いわゆるベストセラーや文庫、新書等安直な書物の購入へと向かい、逆に学術書や専門書の購入度が低下し、図書館は貸本屋化を進めることは明白ではないだろうか」と問題視している。そして「実際に利用する経験上言えば、極端に高価な書物、稀覯書、大型の全集や叢書、あるいはそれぞれの分野で古典的な価値ある底本等、手元に置くことのできない書物が確実に、できれば身近にあることが図書館への期待である。国会図書館と同程度の図書館が各地方ブロックにひとつ、できれば一県に一箇所あればいい。そこでじっくり調べ物ができるとするのが理想である」と述べる。「図書館が学者や物書き用のためにだけあればいいと言うわけではない。大衆のために必要である」としながらも「大衆に人気があるからと言って、ベストセラー本やマンガ本やビデオやCDを所蔵して貸出せばいいと言うわけではあるまい」「大衆の娯楽については民間の書店や貸本業に委ね、図書館は大衆の日常的思考のために価値のある本を備えるべき」とする。

23. 星野 1965 は、東京の世田谷区に住んでいるが「いまや私の図書館不信は大きすぎて、自分でも処理できないほどだ。館内の壁に貼ってある予約本ベスト



テンを見るたびに、百貨店バーゲン会場を連想する。棚を見ても、これなら本屋へ行けばよかったと後悔する。図書館である理由がないのだ」と述べている。

29. 中村 1927 は、新刊書について「図書館がどのように購入する本を選択しているのか」疑問を呈し、「公共図書館では誰がどのように購入すべき本を選んでも、たぶん一部からは非難を免れないだろう」と述べる。「公共図書館のばあい、私は普通の市民には入手できないような、高価な事典、辞書類、学術書や少数数のすぐれた出版物などを備えてほしいと思っている」「公共図書館がこの種の図書を購入してくれれば、せっかく価値高いのに、商業的に採算がとれないため発行できない図書も発行しやすくなるにちがいない」とする。その選択には見識が必要で「そういう方針をとると、公共図書館の利用者の数は減る」という事態になっても、異論にたじろがないような姿勢が重要だとする。

これらに示されているように、公共図書館での資料選択については、一定の基準による選択が必要であり、ベストセラーのように利用者の希望が多いものよりもむしろ「質の高い」「高価な」「個人では入手しにくい」資料を優先すべきだとの方向性が示されている。

やや質の異なる見解として、次のものがある。

06. 目黒 1946 は「現在、中学や高校の図書室にはたとえば宮部みゆきとか、天童荒太とか、馳周星の本は置いてあるのだろうか。ちょっと興味がある」と述べている。また、雑誌を編集していく際に「掲載されている座談会の発言でハッとしたのは、リクエストにひたすら応えているだけで本はまんべんなく揃うとある司書の方が断言しているくんだり、なるほどと感心してしまった」とし、「数年前にある地方都市の公共図書館の貸出ランキングを見ていたら、ベスト 20 の半分以上もジュブナイル文庫が占めていた」「それはないだろという気持ちが私の中にあった」「ところが今回の座談会でその司書の方は、図書館は市民が支えてくれるもので、ならばその市民のリクエストに応えることが大事なのではないか、と発言している」「本の保存から貸出へ、という七〇年代以降の大きな流れを背景に置けば、これが正論であることが見えてくる」「定価五〇〇円以下の本ばかり借りるなよというのは、図書館は本の保存をしてくれるところだという私の古い考え方が生み出した偏見であり、もはやそういう時代ではない」「もっと開かれた図書館にするために奮闘している図書館員の生の声は、旧弊な私の

意識に直裁にひびいてくる」と述べている。

#### 4-3 現在の図書館利用について

では、この雑誌の巻頭エッセイの筆者たちは、現実の公共図書館の実態をどの程度理解した上で、先に示したような見解を述べているのか。たとえば、次にあげるのは、過去はともかく、現在は図書館をほとんど利用していないというケースである。

02. 出久根 1944 「現在の私は図書館に出かけることは、めったにない」

09. 荒俣 1947 「地域の図書館が、まるで託児所のような風景に変わりだしてからというもの、地元にある小図書館には、足を向けたことがない」

10. 荒川 1949 「子供のころは別としても、おとなになってから図書館にでかけたことはほとんどない。自分のものにならない本を読む気持ちになれない」「借りたものを読むと落ち着かない。本は借りるものではなく買うものだと思っている」

21. 山本 1960 「今住んでいる街の図書館へは、あまり足を運ばなくなった。高校以前、本は買って読む方だったのを次第に思い出したらしい。図書館を居心地がいいとも感じなくなった」

22. 小池 1959 「借りなければ返さなくていい」「図書館から足が遠のいた」「私は図書館のことを何も知らない。図書館の本は、一体、どのような仕組みで、そこに置かれるに至ったのか。選定方法や古い本の行方、司書の方はそこで何をして何を考えているのか」

29. 中村 1927 「いまでは図書館を利用することは一年に一度あるかどうか過ぎない」

また現在の図書館に対して、不満、不信感、あきらめ、などを表明しているケースを次にあげる。

01. 林 1949 「小金井市の図書館」は「隣の三鷹市やら小平市、府中市なんかと比べましても」「三多摩中最低のレベルであって、何かを調べようと思って小金井図書館に行くと、それに対応する文献があったためしがありません」<sup>1)</sup>

23. 星野 1965 「東京の世田谷区」に居住しているが、図書館で「探している本を発見できないことが増えたし、心ときめく本との偶然の出会いもめっきり減った」<sup>2)</sup>

一方、実際に現在の図書館をよく使っていて、それが文章を執筆する上でも有効に機能する施設であることを述べている事例もある。

03. 阿刀田 1935 は「一年あまり前、自宅から三百メートルほどのところに杉並区立図書館の分館が増設

された。蔵書は少ないけれど、私はよく利用している。とても重宝している」という。「著述業者である私と資料との関わりは当然のことながら普通の人よりずっと深い」「職業がいろいろな資料を幅広く利用しなければならない」「仕事なのだから本当に必要なものなら糸目をつけない」「そういう私の立場から言えば、創設間もない、それゆえに蔵書の不十分な図書館は、ほとんど利用価値がないように思われがちだが、さにあらず、ちょいちょい通っている」と述べている。「杉並区では(他区のことには詳らかでないが)区立図書館のネットワークが整備され、うまく機能しているようだ。近所の図書館だけでは不十分だが、区立の中央図書館等々は長い歴史を持ち十分な蔵書を保持している」から、分館で、コンピュータ検索を行ない、中央図書館にあることが分かれば「翌日の午後にはカウンターのうしろの書棚に求める資料が並んでいる」と述べ、具体例として最近、全集のうちの一冊をこの方法で利用したことを紹介している。そして「このあたりに、普遍的な図書館利用法のヒントが潜んでいるように思える」「なにしろ蔵書の少ない図書館が職業的な文献利用にもちゃんと役立っている事実がここにはっきりとある」としている。また、図書館の「リファレンス」については、「どの分野でもかまわない。ある分野について明るい図書館員が、なんとなくいてくれそうな気配、それが図書館と貸し本屋との決定的なちがいののだ」と述べる。

05. 申間 1963 は、実際の調査と図書館利用について、実例を挙げながら以下のように、くわしく紹介している。「例えば、即席食品の歴史を調べたいとフト思ったとき、私はまず、国会図書館に向かい、「主に書籍や業界紙、社史を資料として使」って、「NDC(日本十進分類法)の索引書で、調べたい分野の図書番号の当たりを付け、一階にある、蔵書カードボックスを引き出しごと引き抜き、カードをたぐりながら必要な文献を探し、『文献カード』を作る。そのカードをもとに書籍カウンターで資料を請求する」ことを紹介している。「資料を受け取ったあと、私は抄録作りに入る。資料を読みながら、重要な記述、有用な情報をリーフに書き出す」「このとき注意しているのは、一リーフに一テーマという原則を守ること」「本を執筆するとか、原稿を依頼されたとき、私はそれに関連するリーフを各バインダーから抽出し、パソコンに入力する。大抵は、年表になることが多いので、これをもとに文章としての肉付けをしていく」「これを『知的生産』のための方法と意識したことはない」「無

理なシステム作りは破綻する」「資料調査のバックボーンには、膨大な文献カードの存在がある」としている。これは「本の備忘カード」で「このカードには、書名、作者、出版社、刊行年、定価を書くのはもちろんだが、参考図書の『所蔵』先も記入する」「図書館名をゴム印でつくっており、それを押している」という。そのカードの作り方は「参考文献表、新聞広告、『これから出る本』、雑誌の書評、図書館の新作図書ニュースなどを見て情報を入手したら、すぐにカードを作成」し、「千葉市立図書館にあるコンピュータ端末で、市立図書館のどこに所蔵されているか調べ、あればその図書館名のはんこを押し、分類番号(NDC)を書く」「ない場合は千葉県立図書館へ行き、書名別図書カードボックスから検索する。県立図書館にもない場合は、国会図書館や神奈川県立の川崎図書館(社史が充実している)で検索する(市立・県立図書館にあると分かった本も一応検索する)」という。「所蔵先別にカードを分け」ておき「国会図書館へ行くときには国会図書館のカードだけを、川崎図書館に行くときには川崎のカードを持って行く」「どこにも所蔵されていない本は『購入希望』へ分類し、年代が古くて絶版の本なら『古本屋で探す』へ分類する。『購入希望』でも、お金には限りがあるので、なるべく図書館にリクエストして買ってもらっている」という。その際に「大衆小説やサブカル本なら市立図書館に、学術書は県立図書館にと、リクエストは図書館のカラーで使い分ける」「図書館の役割分担を考えることが大事」だとする。

06. 目黒 1946 は、「個人的にも筆名を使って評論を書いているので、その資料関係」で利用している。「原則的には本は購入する主義なので、新刊を借りに行くことはないが、絶版が必要になるときは、真っ先に図書館へ」行くという。「資料類はそのとき役立てばいいので、永遠に持っている必要はなく、そういうときは図書館がいちばんいい」とし、必要な部分が数ページだけのときは、図書館のほうが便利であり、具体例として調べものをしていった際に利用した『男鹿市史』『日本競馬史』などを図書館で利用した経験を述べている。また「本に関する雑誌を発行している会社の仕事でも図書館の存在を欠かすことはできない」として、編集作業の際に「原稿に引用文があったりするとすべて現物をあたる」ので「そのたびに図書館にお世話になる」「図書館が存在しなかったら我々の仕事は成り立たないと言っても過言ではない」と述べ、都立中央図書館が、調査の質問に電話で回答して

くれるサービスを知っておどろいたことについてもふれている。

20. 山之口 1960 は、「月に二、三度は図書館に足を運ぶ。家からくるまで十五分ほどのところに、市川市中央図書館があって、ここは市の図書館としては充実した四十五万冊の蔵書を備え、レファレンス・サービスの質も比較的高いから、普通の調べものに重宝している」という。「ここにはない本は、広尾の都立中央図書館か、国立国会図書館」で探すが、閉架式で、複写依頼を利用すると、時間と複写代がかかるが「ぼくが探すような日本語の本なら、これでたいてい見つかる」と述べている。

このように、文芸関係者でも、実際に公共図書館を利用してそのサービスに充足感を感じていることが、エッセイに描かれているのであり、こうした人たちは、ベストセラーの複本購入に反対したり、「高価な」「個人で買えない」資料を図書館が収集するべきだ、とは必ずしも言っていないのである。先に紹介した、現在の図書館の資料選択に異議をとなえているエッセイの筆者は、ほとんどが、現在は図書館を利用していないか、自らの要求するサービスが図書館で提供されていないことに失望している人たちなのである。

たとえば、国立国会図書館での対応についてふれている例でも、次のような違いがある。

01. 林 1949 は「大英図書館でも、ケンブリッジでも」司書が閲覧者の席に本を持っていくことを紹介し、日本では「みんな司書というものは出納台のところにもふんぞり返っていて」「閲覧者は貴重な時間をただの順番待ちで待たされて、無駄にしています」「その諸悪の根源は国会図書館」「あそこに行く待つ時間ばかり長くて、全然なんにも勉強できない」とする。

03. 串間 1963 は「利用者が多いため、請求した書籍・雑誌が出てくるまでに時間がかかる」「十七時の閉館時間などあつという間だ」としながら、「時間を有効に活用する方法」として、図書と雑誌の資料請求票の出し方を工夫したり、一般研究室を利用すると「二〇時まで利用可能」であることを紹介している。

また、図書館と個人蔵書の関係や図書館の将来像についての見解を次にあげる。

01. 林 1949 は「図書館の使命は」「どれほど質の高い本をそろえて持っているか」であり、取捨選択が図書館のステータスを決める、という。「図書館がただ座っていてどんどん閲覧者が増える、増やすためにベストセラーをたくさん置くなつていう、そういう方向

じゃなくて、もっと主体的に、本当は何をしなければいけないかということ、深甚の反省を加えて考え直してみる、そういう図書館がこれからは出てくるべき」だとしている。

06. 目黒 1946 は「定価五〇〇円以下の本ばかり借りるなよというのは、図書館は本の保存をしてくれるところだという私の古い考え方が生み出した偏見であり、もはやそういう時代ではない」とする。

03. 阿刀田 1935 は、「図書館に所蔵されている本をわざわざ自分で持つことはない」「図書館とのタイアップを考えること」が必要とする。ただし「リファレンス・ブックを充実させること」については「よいものを身近にそろえておくほうがよるしい」「もちろん図書館にも」あるが「この手のものは、そば近くにあるほうがありがたい」として、そうした資料は個人で購入しているという。具体例として『日本国語大辞典』（小学館）、『角川日本地名大辞典』（角川書店）、『世界名著大辞典』（平凡社）、『国書総目録』（岩波書店）、『日本人物文献目録』（平凡社）、『内容細目・作品論文図書目録』（図書館流通センター）などがあげられている。

## 5. おわりに

1979年にNHKで放映され、その後も何度か再放送された、向田邦子原作『阿修羅のごとく』が、映画化され、2003年秋に公開されることになった<sup>1)</sup>。このドラマでは、四人姉妹の三女（いしだあゆみ）が、図書館に勤めているキャラクターに設定されており、映画の公開に先立って、NHK衛星放送（BS 11 ch）で、2003年7月に再放送された。あいかわらずステレオタイプの女性図書館員が、最近のテレビ画面に登場していたわけである。また、同じく、2003年夏に松浦亜弥が歌った『Good-bye 夏男』の歌詞には、「図書館でバイトしてたら」「イメージで『まじめな子』にキャラ設定されちゃた」というフレーズが使われていた<sup>2)</sup>。

一方、2003年春に刊行された『知のテーマパーク おもしろ図書館であそぶ』に、高野文子による「エッセイ・図書館は、はずかしい マンガ・るきさん」が掲載されている。「るきさん」のネームでは、「十年前と比べて図書館は変わった。まずパソコンがはいったし、そのかわり喫茶室がなくなった（前はけっこうあったのよ）。かわらないのは鉛筆の短いことと、職員さんの笑顔だわね」「一番変わったのはお客さんかしら。前は来てなかった人が来るようになった」と述べ

られている<sup>4</sup>。

今回分析対象としたエッセイの著者の一人である目黒孝二は、その著書『だからどうしたというわけではないが。』の中で、「幼いころから図書館を利用したことがほとんどない」「なんだか『コワイところ』のような気がしていた。その『コワイところ』というイメージは、当時の図書館が持っていた『威厳』と無縁ではないと今なら納得する」(p.128)『『中小都市における公共図書館の運営(中小レポート)』の結論は「今から振りかえると『利用者至上主義&貸出至上主義』のもとだと言われても仕方のないところはあるが、貸し出すことよりも本を大事に取っておくことを第一義にする旧来の考え方に対する明確な反旗であり、革命的な宣言だった事実は消えない。幼い私が感じた図書館の怖さは、つまり貸出しより保存を大事にする旧来の図書館が持っていた威厳に対する恐怖だったとも言えるのである」「図書館が多くの利用者に開放されてその威厳を捨てたことがはたしてよかったことなのかどうかは別の話」(p.134)であると述べている<sup>4</sup>。

文芸関係者のイメージする図書館については、一部の人たちはかつての「威厳」のある図書館に復することを求めている、と言ってもいいだろう。知的階層など、限られた少数の人たちが、調査・研究目的で利用する、目的のはっきりした利用者を相手に「質の高い」「高価な」「個人で対応できない」資料を提供する、また個人では保存できないような雑誌や貴重な資料なども図書館にはおいておく、娯楽のための資料は最小限度にとどめ、ベストセラーなども何冊かは購入するが、現在のように複本を大量に購入して無料で貸出すことはしない、という方向性である。しかし、そうした見解を表明しているのは、現実の図書館をほとんど利用していないか、あるいは自らの要求水準が公共図書館の実態を無視しているといえるほど高すぎるために、実際の図書館サービスに満足できないで批判的になっている人たちなのである。

その場にはない資料を提供するための図書館ネットワークはすでに形成されており、そうしたネットワークの存在を前提に利用することが、阿刀田のいう「普遍的な図書館利用のヒント」となっている。また、串間が「図書館の役割分担を考えることが大事」としているように、身近にある図書館はひとつの窓口と考えれば、そこからさらに多様な資料が利用可能であり、必要ならば、国立国会図書館などの資料も取り寄せてもらうことができる。図書館に批判的な文芸関係者は、そのことを認めようとしなくて、自分たちが求めるも

の、調査研究のために必要な資料が、「その場で」「即座に」提供されることを最優先に考えている。そのために、資料費をその分野の資料に重点的に使う一方で、ベストセラーや娯楽の本を求めて図書館にやってくる利用者は、「待たせればよい」から複本は少なくともよい、「待つのがいやなら自分で購入すればよいではないか」とする。それは「自らの要求のみを正当で至上のものとする」考え方であると言えるのではないか。今回分析対象としたエッセイの筆者でも、実際に図書館を利用している人たちが、図書館の協力体制や、単純な分担収集とは異なる意味での図書館ごとの役割分担を理解した上で、身近な図書館に依頼した資料が届くのを待っていたり、求める資料の内容によって図書館を使い分けることを主張しているのとは対照的である。

雑誌『図書館の学校』に掲載されたの巻頭エッセイには、図書館の状況を一定程度理解している言説も含まれているのであり、そうした考え方が文芸関係者全体に広がっていかないのは、図書館のがわにも責任がないとはいえない。公貸権の問題に関連して、図書館協会などが中心となって、公共図書館の実態調査が実施されることになったが、そうした具体的な状況を示してアピールすることが重要なのである<sup>5</sup>。図書館の実情をふまえない文芸関係者の発言が、くりかえしメディアにとりあげられると、あたかもそれが事実であることを前提としたような議論がまかりとおることになりかねない。図書館関係者の適切な対応が求められている。

今回は時期とテーマを限定したが、『図書館の学校』の巻頭エッセイを分析することで、文芸関係者の図書館観をさらに異なる観点から明らかにしたいと考えている。

## 注

### 1. はじめに

1) 「ベストセラーをめぐる攻防 作家 vs 図書館」(NHK『クローズアップ現代』2002年11月7日放送)番組の中では、作家の井上ひさしがインタビューに応じている。

また、井上は、雑誌のインタビューにこたえて、「お金がないんですから、それぞれの図書館は専門化するしかない」「予算のないたくさんの図書館が専門化し、ネットワーク化すべきだ」と述べている。出典は、次のとおり。

井上ひさし「巻頭インタビュー 図書館は専門化していくべきなのです」毎日ムック・アミューズ編『知のテーマパーク おもしろ図書館であそぶ 専門図書

館 142 館 完全ガイドブック』毎日新聞社、2003. 3, pp. 8-9

一方、町田市立図書館のホームページでは「市町村立図書館が分野による特化を始めたなら、図書館の魅力は半減します」として「図書館を訪れるのは、特定の分野の本が読みたい、あるいはテーマについて調べたい等、何か目的があつての場合もありますが、特に目的はないけど、書架をのんびり眺めながら、おもしろそうな本があれば借りたいという場合も多いものです。そのとき、ふと目にとまった本との思いがけない、あるいは運命的な出会いを経験された方も多いと思います。それこそが読書の醍醐味であり、図書館へ行く楽しみでもあります。分担収集は、図書館の魅力を半減させることになるでしょう」「町田市立図書館は、都立図書館を始め、全国の図書館とネットワークを組んで、自館で所蔵していない本を取り寄せるサービスを行なっています。もっとも、これはほとんどの公立図書館が行なっているサービスで、目新しいものではありません」と述べられている。出典は、次に示す、町田市立図書館のホームページ。

町田市立図書館「NHK『クローズアップ現代』に対する図書館の見解」2002. 12

<http://www.city.machida.tokyo.jp/shi/event/library/>

なお、かつて放映されたNHKの子ども向け番組（『週刊子どもニュース』1997年11月2日放送）には、「図書館」をテーマにとりあげた際、出演者のひとりである子どもがレポーター役となつて、町田市立中央図書館を訪問している回が存在する。この番組では、館内の職員が行なっている業務について、レファレンスサービスや障害者サービス、広報活動などについて、館内を案内しながら紹介し、都立図書館とのネットワークによる協力貸出で提供された資料をスタジオに持ち込んで、出演者が図書の実物を手にしながら、システムについて説明している場面がある。

2) こうした議論のきっかけになつた文章は、いくつか存在するが、図書館関係の雑誌に掲載されたものと、一般のメディアに掲載されたものを、次に示す。

津野海太郎「市民図書館という理想のゆくえ」『図書館雑誌』1998. 5, pp. 336-338

「図書館：無料の貸本屋？ベストセラーめぐり論議」『朝日新聞』1999. 5. 28, p. 22

3) 図書館と作家の権利とを対立するものであるのかのようにとりあげ「公貸権（公共貸与権）」についてふれた新聞記事に、次のものがある。

「対立？利用者利益と作家の権利 公共図書館の人気本大量購入」『毎日新聞』2002. 7. 30, p. 22

「図書館と新刊『大量貸出で著作権侵害』『公共貸与権』導入策も一案」『読売新聞』2002. 9. 12, p. 15

なお、このテーマに関して、日本図書館協会の発行する『図書館雑誌』は、特集を組み、複数の背景をもつ関係者の見解を、同時に掲載している。

「小特集 図書館は出版文化をどう支えるか」『図書館雑誌』vol. 95, no. 6, 2001. 6, pp. 410-421

西野一夫（図書館雑誌編集委員長・川崎市立麻生図

書館）「小特集にあたって」

山本昭和（神戸市立中央図書館）「公共図書館の役割と出版文化の発展」

手嶋孝典（町田市立図書館）「図書館は『無料貸本屋』かをめぐって」

菊地明郎（筑摩書房）「『無料貸本屋』と言われた図書館へ」

今村正樹（偕成社）「公共図書館と児童書出版の将来」

栗原哲也（日本経済評論社）「知の窓口としての図書館へ」

「特集 対論・図書館と出版文化を考える」『図書館雑誌』vol. 97, no. 9, 2003. 9, pp. 630-653

糸賀雅児（慶應義塾大学文学部）「図書館の新たなビジネスモデルで出版市場との共存を」

三田誠広（日本文藝家協会常務理事）「公共貸与権と保証金制度について」

相賀昌宏（小学館社長）「図書館と出版社の協力関係の発展を考える」

手嶋孝典（町田市立図書館）「誰のための公立図書館か」

才津原哲弘（能登川町立図書館）「『図書館栄えて物書き減ぶ』とは本当のことかー琵琶湖のほとりの小さな町の図書館から」

竹内 愼（日本図書館協会理事長）「みんなをつなぐ広い世界がある」

この問題は、2002年度全国図書館大会でも、シンポジウムのテーマになっている。

「シンポジウム 進化する図書館ー著作権を中心とする課題と将来像を考える」『平成14年度 第88回全国図書館大会・群馬』2003, 日本図書館協会, pp. 371-387

また、出版関係の業界紙も、このテーマを何度か取り上げている。

「図書館の“新刊貸出し増”に懸念 神奈川トーハン会で嶋崎会長」『新文化』2001. 3. 7, p. 1

「図書館はすべてのデータ公開を！クローズアップされる貸出し実態 書籍販売総額に匹敵」『新文化』2002. 11. 14, p. 1

2002年9月7日には「シンポジウム 激論！作家 VS 図書館 どうあるべきか」が、日本ペンクラブ主催により開催された。この模様は、雑誌『創』に掲載されている。

「『実情を全く把握していない』と互いに論難！図書館問題をめぐる作家との大激論」『創』2002. 11, pp. 98-119

また、2003年11月9日には、日本プレスセンターで、「シンポジウム 作家・読者・図書館ー公貸権を考える」が開催された。主催は、日本ペンクラブ。

なお、当日配布されたパンフレットの内容が、日本ペンクラブのホームページ「言論表現委員会」の部分で公開されている。

一連の出版業界からの発言に反論する場として企画された座談会の記事の全文が、次の雑誌に掲載されている。

小杉 亮, 斉藤誠一, 手嶋孝典, 堀 渡, 沢辺均「巻頭座談会 本が売れない原因を図書館のせいにするな! 図書館バッシングに反論」『ず・ほん』no. 8, 2002. 10, pp. 3-29

なお, 文藝家協会常務理事で, 公貸権についての発言をくりかえしている, 三田誠広の著作が刊行されている。

三田誠広『図書館への私の提言』勁草書房, 2003

ただ, 図書館を批判するだけでは問題の解決には程遠いことが, 出版関係者の発言でもふれられている。代表的なものは次のとおり。

佐野真一, 永江 朗, 安藤哲也「座談会 2003年日本の出版界はこう動く」『季刊 本とコンピュータ』2003春, pp. 34-42

この中では, 佐野「具体的にだれがどれほどの損失を被っているといえるのか。『図書館栄えて作家減ぶ』というけれど, じゃ, 公共図書館はほんとうに栄えているのだろうか」永江「公共図書館が栄えているわけがない。図書購入費も職員の数もますます減らされているのが現実ですから」(p. 39) という発言がある。

この佐野の発言は,

楡 周平「図書館栄えて物書き減ぶ」『新潮45』2001. 10, pp. 116-123, を視野に入れたものと考えられる。

また, 佐野の図書館に関する見解は, 次の図書に収録されている。

佐野真一『だれが「本」を殺すのか』プレジデント社, 2001, pp. 307-350

佐野真一『だれが「本」を殺すのか 延長戦』プレジデント社, 2002, pp. 93-115・pp. 187-225

こうした見解に対して, 現場の市立図書館長の立場で, 具体的に反論している文章として, 代表的なものは次のとおり。

常世田良「公共図書館は出版文化の敵にあらず」『季刊 本とコンピュータ』2002春, pp. 54-58

なお, 上記の論文も収録されている単行本が出版されている。

常世田良『浦安図書館にできること 図書館アイデンティティ』勁草書房, 2003

また, 田井郁久雄による一連の論文では, 実際のデータに基づく実証的な議論が, 展開されている。

田井郁久雄「複本購入の事例分析と複本購入批判の検証」『図書館界』vol. 53, no. 6, 2002. 3, pp. 508-524

田井郁久雄「図書館は『本を殺している』か? 佐野真一氏の手法を批判する」『三角点』復刊4号, 2002. 9, pp. 5-13

田井郁久雄『「貸出」は図書館も出版文化も発展させる』『図書館界』vol. 54, no. 6, 2003. 3, pp. 260-276

また, 『三角点』復刊7号, 2003. 7. 30, では, 「出版・作家 v 図書館問題—新聞・雑誌記事リスト(2000. 12-2002. 5)—」として, 50点あまりの「公立図書館バッシング記事」を時系列的に並べて紹介している。著者は, 馬場俊明・甲南大学教授。

## 2. 雑誌『図書館の学校』について

### 1) 小田光雄『図書館逍遥』2001, 編書房

この本では, 日本や海外の小説だけでなく, アニメーション・コミックなどで描かれている図書館を多数紹介している。また, 本の帯には「本書は奇人とか, 変人とか, 天才と呼ばれた文学者たちの図書館に対する強い執着と愛情を中心に記した図書館讃歌である」と記されている。

### 2) 2003年3月号までの最終ページには, 「編集: 特定非営利法人図書館の学校」「発行: 株式会社図書館流通センター」とクレジットされていた。2003年に入って, 4月号より「誌面を大幅にリニューアルする」(『図書館の学校』No. 038, 2003. 2, p. 70) 方針が示された。

2003年4月号以降の最終ページには, 「発行: 特定非営利法人図書館の学校」とあるのみで, 図書館流通センターのクレジットは消えている。2003年4月号の編集後記には「今号より編集・発行とも図書館の学校が行なうこととなりました」とあり「薄くとも中身の濃い雑誌を作ってまいりたいと思っております」と述べられている。ちなみに全体のページ数は, 2002年度(2002年4月~2003年3月)までは, ほぼ平均88ページ, であったのに対して, 2003年4月からは, 版形はA5からB5にやや拡大したが, ページは32ページと半分以下になっている。1号分の定価は, 500円から400円(税別)に引き下げられたが, 購読会員の年会費は, 3,000円のままである。

### 3) 『図書館の学校』No. 001, 2000. 1(創刊号)では, 表紙裏の部分に「図書館のイメージ」と題する次のような文章が掲載されている(著者は図書館の学校常務理事 小川俊彦)。「図書館という言葉は誰もが知っています。しかし, 図書館の機能や目的はなんだろうかということになると, それぞれの人の思い描いている図書館像が必ずしも一致するものとはいえません」

また, 『図書館の学校』No. 038, 2003. 2の表紙裏には, 「ミステリーは図書館がお好き?」と「図書館がタイトルに使われているもの数点」が紹介されている(著者は図書館・メディア研究所 小畑信夫)。とりあげられているのは『図書館警察』『図書館の美女』『図書館の死体』『図書館の親子』『図書館長の休暇』『図書館戦隊ビブリオン1・2』『図書室の海』などであり, 「図書館は, 人類の頭脳を記録保存する, まるで知識記録の脳そのものが保存してあるような不思議空間が演出されやすい。だからこそ, ミステリーは図書館好きなのかも知れない…」と記されている。

## 3. 雑誌『図書館の学校』巻頭エッセイの分析

### 1) 林 望「図書館へ行こう」(講演)『図書館の学校』No. 001, 2000. 1, pp. 2-25

### 2) 出久根達郎「図書館が学校」『図書館の学校』No. 002, 2000. 2, pp. 2-15

### 3) 阿刀田高「図書館アト・ランダム」『図書館の学校』No. 003, 2000. 3, pp. 2-15

### 4) 吉村 昭「図書館がなければ, 小説は書けません」(インタビュー)『図書館の学校』No. 004, 2000. 4, pp. 2

- 6
- 5) 串間 努「個人メディアに活用！極私的図書館利用法」『図書館の学校』No. 004, 2000. 1, pp. 7-18
  - 6) 目黒孝二「図書館員をめざした若き日のこと」『図書館の学校』No. 005, 2000. 5, pp. 2-13
  - 7) 鶴見俊輔「図書館から図書館へ」『図書館の学校』No. 006, 2000. 6, pp. 2-11
  - 8) 柏木 博「情報の宇宙（図書館）の楽しみ」『図書館の学校』No. 006, 2000. 6, pp. 12-15
  - 9) 荒俣 宏「図書館はおもしろくない」『図書館の学校』No. 007, 2000. 7, pp. 2-9
  - 10) 荒川洋治「図書館には行かない」『図書館の学校』No. 007, 2000. 7, pp. 10-14
  - 11) 山口昌男「図書館との出会い」『図書館の学校』No. 008, 2000. 8, pp. 2-9
  - 12) 石川 准「視覚障害者の読書スタイル 電子テキストの時代」『図書館の学校』No. 008, 2000. 8, pp. 10-15
  - 13) あんばいこう「酒場と図書館」『図書館の学校』No. 008, 2000. 8, p. 16
  - 14) 種村季弘「明るい図書館・暗い図書館」『図書館の学校』No. 009, 2000. 9, pp. 2-6
  - 15) 長山靖生「図書館が生活のリズムをつくる」『図書館の学校』No. 009, 2000. 9, pp. 7-14
  - 16) 阿部謹也「図書館で過ごした日々」『図書館の学校』No. 010, 2000. 10, pp. 2-8
  - 17) 中西秀彦「電子時代の図書館の役割を考える」『図書館の学校』No. 010, 2000. 10, pp. 9-13
  - 18) 小川洋子「図書館とアンネ・フランク」『図書館の学校』No. 011, 2000. 11, pp. 2-6
  - 19) 石川九楊「図書館とコンサートホール」『図書館の学校』No. 011, 2000. 11, pp. 7-13
  - 20) 山之口洋「仇敵にして戦友」『図書館の学校』No. 012, 2000. 12, pp. 2-6
  - 21) 山本昌代「ふりむけば図書館」『図書館の学校』No. 012, 2000. 12, pp. 7-11
  - 22) 小池昌代「図書館のことを何も知らない」『図書館の学校』No. 012, 2000. 12, pp. 12-15
  - 23) 星野智幸「魅惑的な異界」『図書館の学校』No. 013, 2001. 1, pp. 2-6
  - 24) 東 秀紀「大英図書館のイラン人」『図書館の学校』No. 013, 2001. 1, pp. 7-13
  - 25) 長田 弘「問われなければならないのは」『図書館の学校』No. 014, 2001. 2, pp. 2-6
  - 26) きたやまようこ「著作権について 絵本作家の立場から」『図書館の学校』No. 014, 2001. 1, pp. 7-9
  - 27) 別役 実「近所の図書館」『図書館の学校』No. 015, 2001. 3, pp. 2-6
  - 28) 夏目房之介「マンガにおける図書館」『図書館の学校』No. 015, 2001. 3, pp. 7-12
  - 29) 中村稔「図書館・文学館あれこれ」『図書館の学校』No. 016, 2001. 4, pp. 2-6
  - 30) 内堀 弘「棚作り」『図書館の学校』No. 016, 2001. 4, pp. 7-9
  - 31) 松本圭二「ビネガー博士のラクラク健康法」『図書館

の学校』No. 016, 2001. 4, pp. 10-14

- 32) 林 望「図書館は無料貸本屋か ベストセラーの『ただ読み機関』では本末転倒だ」『文藝春秋』2000. 12, pp. 294-302
- 33) 林 望「図書館へ行こう」（前掲）は、講演記録のためか、一貫性を欠く部分が見られる。たとえば「世の中で活字離れだというふうに言われているけれども、それはまったくのでたらめだ」（p. 2）「活字離れというのは嘘だろうと思うんです。ちゃんと活字を読んでいる」（p. 4）と言っているが、別のところで「若い人たちの活字離れというのは全世界的な趨勢だというふうに言われております」（p. 10）と紹介している。また、「読み聞かせということだって、図書館のサービスとしてそういうことをやったっていいわけですけども、それまたあまりどこもやっていないだろうと思います」（p. 25）とある。この「読み聞かせ」をどのようなもの意識して、ここでとりあげているかは不明だが、児童を対象とした「絵本の読み聞かせ」は、全国の公共図書館で実施されている行事のプログラムに組み入れられている。
- 34) 今回分析対象としたエッセイで、子どものころの利用体験で、公共図書館にこれほど資料のリクエストをしたことについてふれているのは、串間だけである。生年によって、利用した図書館の状況が異なっていることにもよるが、彼自身が積極的に図書館を利用していたことを示しているといえよう。

#### 4. 図書館についてのコメントの諸相

- 1) 林が居住する小金井市近隣（東京多摩地区）の人口10～15万人の自治体について、その図書館の活動状況を『日本の図書館 統計と名簿2002』日本図書館協会、2003、でみると次のようになる。

自治体名、人口、図書館数、中央図書館（最も蔵書の多い館）の蔵書冊数、中央図書館分の年間購入冊数、を示す（2001年度のデータ）。

昭島	106 千人	5 館	256 千冊	14,281 冊
小金井	107	3	289	9,551
国分寺	108	5	133	6,668
東久留米	113	4	192	7,099
武蔵野	131	3	344	20,214
青梅	139	11	190	7,635
多摩	141	6	98	31,753*
東村山	141	5	186	11,102

また、林の発言に、比較の対象として登場する、三鷹、小平、府中、はいずれも人口15万人を超える自治体であるが、その図書館の状況は以下のとおり。

日野	163 千人	9 館	305 千冊	35,121*冊
立川	163	9	362	16,325
三鷹	164	3	367	18,793
小平	172	11	408	26,352*
西東京	177	6	178	8,243
調布	199	11	539	30,163
府中	221	13	615	22,230

\*多摩市、日野市、小平市、の購入冊数は市内全館の

合計。

なお、多摩地区の人口10~15万人の自治体では、昭島、武蔵野、青梅、東村山は、図書館のホームページが存在し、そこから資料検索が可能となっている。小金井、国分寺、東久留米、多摩は、市のホームページから、図書館の住所・電話番号・地図・開館時間などは確認できるが、資料検索はできない。一方、人口15万人を超える自治体では、すべての図書館のホームページから資料検索が可能で、小平、西東京、調布、についてはホームページから、資料の予約をすることができるようになってきている(2003年9月17日時点での状況)。

多摩地区の人口10万~15万人の自治体で、小金井市の図書館は、中央図書館(もっとも蔵書の多い館)の蔵書冊数では、武蔵野市についているが、購入冊数はそれほど多いとはいえない。また、人口が多く、財政状態も小金井に比べると堅調な(『市町村情報総覧2002-2003』特定非営利法人市町村情報ネットワークセンター、2002、によれば、財政力指数は、小金井市0.97、三鷹市1.20、小平市1.04、府中市1.29、である)三鷹、小平、府中に比べれば見劣るところもたしかにある。ただ、林が「隣の三鷹市やら小平市、府中市なんかと比べ」と「三多摩中の最低レベル」であり、「何かを調べようと思って」も「それに対応する文献があったためしがない、と断定的に酷評するほどの状況ではないと思われる。

小金井市立図書館の2階「参考資料室」には、事典・辞書・統計・図鑑などの「参考図書」が9,920冊開架されており、書庫にはさらに7,103冊所蔵されている(小金井市や東京都などに関連のある「地域に関する参考資料」は除いた数字。出典は『小金井市立図書館2003年8月度蔵書統計表(館別・分類別)月報』)。

また、『小金井市の図書館 平成13年度版』小金井市立図書館、2002、9、p. 29、によれば、2001年度のリクエスト件数は、27,472件、このうち他の図書館から借りて提供したものは、都立2,434件、国会23件、他市1,313件、他機関28件、となっている。小金井市立図書館でも、その場がない資料を一定の待ち時間で提供する「リクエストサービス」がシステムとして機能しており、他の図書館から借りて提供している例も相当程度、存在していたことを示している。

- 2) たとえば、書評家・評論家として、10冊以上の著書を刊行している、坪内祐三が、その日常生活での資料収集状況を記述した『三茶日記』には、世田谷区立中央図書館で、資料を収集している様子がしばしば登場する。

「朝、世田谷区立中央図書館に電話をかけて、今日が期日だった本の返却を延長させてもらう。世田谷区立中央図書館は、いち時に、開架の本五冊、書庫の本五冊の計十冊借り出すことが出来、貸し出し期間は二週間なのだが、その間に予約が入らなければ、さらに二週間の延長が認められる」(1997. 11. 11, 火) p. 19

「昼頃、仕事用に借りていた本七冊返しに世田谷中央図書館に行く」(1998. 6. 16, 火) p. 54

「午後、『鳩よ!』の連載原稿のため正岡子規のことを調べに世田谷区立中央図書館に行く。資料用の本四冊とお楽しみ用の本一冊借りて帰宅する」(1998. 8. 3, 月) p. 61

「昼頃、原稿執筆に必要で、世田谷区立中央図書館に村上春樹の『辺境・近境』を借りに行くが、貸し出し中ではないのに、館中に見当たらない」(1998. 9. 13, 日) p. 68

「昼頃、世田谷中央図書館に本の返却および資料チェックに行き、ついでに、新聞等で話題の例の『ニューヨーカー』のケネス・タイナンの日記抄をコピーする。(2000. 8. 15, 火) p. 180

「昼頃、世田谷中央図書館に本を返却しに行き、『ニューヨーカー』の最新号の面白そうな記事を幾つかコピーし」(2000. 10. 3, 火) p. 190

「一週間ほど前、世田谷中央図書館で隔月誌『デザインの現場』(美術出版社)の最新号(四月号)を立ち読みした」(2001. 5. 12, 土) p. 227

「その本がとてもしたくなかったのだ。しかし世田谷中央図書館には所蔵されていなかった」(2001. 5. 12, 土) p. 228

「昼頃、桜新町の歯医者に行き、そのまま世田谷中央図書館に向う」(2001. 5. 22, 火) p. 230

出身校の早稲田大学中央図書館や、出講していた目白学園短大の図書館を利用したことも、『三茶日記』にでていますが、坪内は、世田谷区立中央図書館(本文の表記では、区立が入っているものと、省略されているものがある。ここでは『三茶日記』の記述をそのまま示した)を、資料収集のために利用していたことがわかる。

坪内祐三『三茶日記』2001、本の雑誌社、は「『本の雑誌』から読書日記の原稿依頼があったので今日から日記をつける」(1997. 1. 11, 土)という文章からはじめられている。

## 5. おわりに

- 1) 映画『阿修羅のごとく』では、「昭和54(1979)年」「昭和55(1980)年」が舞台になっていることが、字幕で示される。三女(深津絵里)が図書館でカウンター業務をしたり、書架整理をしている場面があった。髪型やメガネをかけている設定はテレビドラマと同様。
- 2) 田中敦司「図書館で働くということ」『図問研あいち』No. 383, 2003. 8, p. 1、では「図書館でバイトしてたらまじめな子だと思われてしまい、自分はそんな『純な女』じゃないからサヨナラしましょうという内容ですよね。『図書館でバイト=まじめな子』というステレオタイプができています。TVドラマ『ビューティフルライフ』で、ようやくまじめ一辺倒のイメージが変わったと思っていたのに、また旧来のイメージにもどっています。図書館で働いている人々は、そんなにまじめだと思われているのです。しかし、その背後には『堅物』という印象があるはず。前述の歌詞でもそのように表現しています。図書館職員(必ずしも司書ではないが)がマスコミなどに現れることが多くなっ



た昨今、図書館職員堅物論を払拭すべきではないかと思っています」と紹介されている。

なお、テレビドラマ『ビューティフルライフ』における、図書館や図書館員のイメージについては、これまでステレオタイプとされてきたものと大きな違いはない部分が存在することを、下記で論じている。

佐藤毅彦「テレビドラマ『ビューティフルライフ』における“図書館”観の批判的検討——図書館はどうみられてきたか・2——」『甲南女子大学研究紀要』vol. 37, 2001. 3, pp. 105-135

- 3) かつて毎日新聞から刊行されていた『アミューズ』（月2回刊）では、図書館に関する特集号を刊行していた。本誌は休刊となったが、2003年に、毎日ムック・アミューズ編『知のテーマパーク おもしろ図書館であそぶ 専門図書館142館 完全ガイドブック』毎日新聞社 2003. 3, を刊行した。この中に、高野文子による「図書館は、はずかしい」というタイトルの文章（p. 70）と、マンガ「るきさん」（p. 71）が掲載されている。

毎日ムック・アミューズ編「知のテーマパーク おもしろ図書館であそぶ 専門図書館142館 完全ガイドブック」毎日新聞社 2003. 3, pp. 70-71

なお、かつて、高野文子が、雑誌『Hanako』に連載していた「Miss RUKI」には、図書館を利用する女性キャラクターが登場していた。

高野文子「Miss RUKI」『Hanako 臨時増刊』1990. 11. 1, pp. 159-225

- 4) 目黒孝二「図書館めぐり」『だからどうしたというわけではないが。』本の雑誌社, 2002, pp. 122-139

- 5) 「公立図書館貸出実態調査を実施」『図書館雑誌』vol. 97, no. 8, 2003. 8, p. 493, によれば「1999年および2000年の年間ベストセラー各20点, 芥川・直木・日本翻訳文化・日本出版文化・サントリー学芸・毎日出版文化・芸術選奨文部大臣・大宅壮一ノンフィクションの各賞受賞作品など合わせて84点について, その所蔵冊数, 調査時点での残予約件数, 貸出回数を聴いた」。「調査対象は, 図書館設置市区町村単位に蔵書冊数順に並べ, 機械的に500抽出した。これは図書館設置市区町村の約3分の1である」「複数館をもつところは14%, 蔵書冊数10万冊未満が59%を占めている」とある。

この調査結果は, 日本図書館協会のホームページに「公立図書館貸出実態調査（平成15年7月）報告書」として公開されている。

なお, 2003年10月22日, 日本図書館協会と日本書籍出版協会は, 日本図書館協会研修室で, この調査結果についての記者発表を行い, 全国紙, 専門誌, 関連団体から, 約30名の出席者があった。

さらに, 2003年10月29日には, 日本書籍出版協会で「第2回作家・図書館・出版社協議」が行われた。